大阪公立大学
Osaka Metropolitan University
学術情報リポジトリ

万葉集の雁考

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2014-09-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 朴, 喜淑 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24729/00005072

万葉集の雁考

朴　喜淑

一　はじめに

万葉集には数多くの鳥が歌われている。中西悟堂氏「万葉集の動物　二」（『万葉集大成　8』平凡社・一九五三年）が、

> 万葉集全二十巻、四五一六首の中から、鳥及び鳥に関係ある名詞の件数を拾ひ上げて見ると、五八九件、即ち一三・〇四％に及んでゐるのは、万葉人にあつては鳥は単に自然の景物であるだけではなく、特に相聞に関与しての大きい条件であつたからで、恋愛のほかにも人事を鳥に寄せて詠んだ歌が多い。

と述べているように、ホトトギス、雁、鶯、鶴、鴨など三十種類以上の鳥が自然の景物として、あるいは恋愛、人事とかかわりながら詠まれている。その中、雁は巻八と巻十の「秋雑歌」に、

> 秋の日の　穂田を雁がね　暗けくに　夜のほどろにも　鳴き渡るかも　（8・一五三九）
>
> ひさかたの　雨間も置かず　雲隠り　鳴きそ行くなる　早稲田雁がね　（8・一五六六）
>
> 秋風に　大和へ越ゆる　雁がねは　いや遠ざかる　雲隠りつつ　（10・二一二八）
>
> 我がやどに　鳴きし雁がね　雲の上に　今夜鳴くなり　国へかも行く　（10・二一三〇）[1]

と、空を飛んでいる例や鳴く例を中心に三十七首存在する。渡り鳥である雁は、日本には、秋に北の方から飛来し、春には北に帰る。このような渡り鳥には他に鴨がいる。ところが、鴨は巻八と巻十の「秋雑歌」[2]に一首も歌われていない。

一方、巻四と巻十一・十二には、

> よそに居て　恋ひつつあらずは　君が家の　池に住むといふ　鴨にあらましを　（4・七二六）

我妹子に　恋ふれにかあらむ　沖に住む　鴨の浮き寝の安けくもなき　（11・二八〇六）

鴨すらも　己がつまどち　あさりして　後るる間に　恋ふといふものを　（12・三〇九一）

のように、鴨が恋情とかかわって歌われている。これに対して、この巻四と巻十一・十二[3]に雁は一例もなく、対照的な様相を示す。万葉集の雁と鴨を分析した先行研究に東光治氏「雁考」（『続万葉集動物考』人文書院・一九四三年）がある。東論文の結論は次のように要約できる。

ア、雁は鴨に比較して体が遥かに大きく、雁類特有の所謂雁行という飛び方をなして鳴き渡る状態が、万葉人に注目された。

イ、雁の歌には声を詠んだものがたくさんあるが、鴨の歌ではその声を詠んだものがない。雁の鳴声が興味を引いたのであるが、鴨の平凡な鳴声には耳を傾けられなかった。

ウ、鴨の方はカルガモを初め、マガモ、コガモ、ヲシドリなど当時内地の各所に繁殖するものが多く、その季節的変異が著しくなかった。

東論文では、雁は盛んに季節的観念として歌われ、鴨は季節的観念として歌われなかったとする。集中の雁の歌をみると、たしかに東論文の指摘通り、多くの歌に飛んでいる雁が詠まれている。月夜や秋空をV字形に鳴き渡る雁は、人々の注目する的となったのであろう。また、日本で卵を生まない[4]雁に比べて、鴨には一年中日本に棲息する夏鴨がおり、更に、集中の鴨の歌には渡りや季節的変化がほとんど詠まれていないという点からも東論文は首肯できる。

結局、東論文の要点は、雁と鴨の習性の違いにより、雁のみが注目されたということになるであろう。しかし、雁と鴨との歌われ方の違いを習性の違いのみに求めてよいのであろうか。雁は、歌が四季分類されている巻八と巻十の「秋雑歌」には詠まれても、相聞の巻である巻四と巻十一・十二には詠まれることがなく、鴨（あぢも含めて）は、雁とは逆に巻四と巻十一・十二の「相聞」には詠まれても、巻八と巻十の「秋雑歌」には詠まれていないという顕著な傾向（左表参照）は、単に習性だけで

巻	巻四	巻八	巻十	巻十一	巻十二
部立て	相聞	雑歌	相聞	雑歌	相聞	相聞
雁	0	12	1	25	3	0	0
鴨	4	0	1	0	0	4	2

は説明できないのではなかろうか。

そこで本稿では、集中に詠まれている雁の歌を分析し、鴨の歌と比較[5]してみる。そして、雁と鴨の歌われ方の違う点について、東論文の指摘する習性以外の原因を探ってみたい。また、こうした分析を通じて、万葉集における雁の位置づけを考えてみることにする。

二　雁の秋の歌

季節	春	夏	秋	冬	不明	合計
雁	4	0	58	0	4	66

右の表は、雁が詠まれている歌を季節毎にまとめたものであるが、他の季節に比べて秋の歌が圧倒的に多いことが分かる。一方、春の歌四首[6]はいずれも第四期に作られた帰雁を詠んだもので、集中の雁の歌六十六首中五十八首が秋の歌であることからすると、特殊であるというしかないだろう。そこで帰雁の歌は例外として、雁の歌われた秋の歌を更に詳しくみていくことにする。

まず、雁が「色付く」、「もみつ」とかかわって詠まれている歌は十五首[7]ある。多くの歌において、雁の鳴き声を聞き、山や草、葉などが「色付く」と歌われている。その十五首中五首に、

今朝の朝明　雁が音寒く　聞きしなへ　野辺の浅茅そ　色付きにける　（8・一五四〇）

雲の上に　鳴きつる雁の　寒きなへ　萩の下葉は　もみちぬるかも　（8・一五七五）

雁が音を　聞きつるなへに　高松の　野の上の草そ　色付きにける　（10・二一九一）

雁がねの　来鳴きしなへに　韓衣　龍田の山は　もみちそめたり　（10・二一九四）

雁がねの　声聞くなへに　明日よりは　春日の山は　もみちそめなむ　（10・二一九五）

のように「なへに」が用いられ、「なへに」によって二つのもの、つまり、「雁の声」と「色付く」が結ばれ、雁の声そのものが「色付き」をせきたてているように歌われている。これに対して、鴨が「もみつ」、「色付く」とかかわって詠まれている歌はない。

一方、雁と「萩」が取り合わせて詠まれている例は八首[8]ある。「萩」は、万葉植物の中でも最も多く詠まれている秋の代表的植物で、「萩」に結ぶ露とともに、「萩」の花や紅葉も多く詠まれている。次の歌二首をみると、

秋萩は　雁に逢はじと　言へればか　（一に云ふ「言へれかも」）　声を聞きては　花に散りぬる　（10・二一二六）

雁は来ぬ　萩は散りぬと　さ雄鹿の　鳴くなる声も　うちぶれにけり　（10・二一四四）

と、雁の飛来と「萩」の落花が歌われており、そして、その裏返しになるのが、

雁がねの　初声聞きて　咲き出たる　やどの秋萩　見に来我が背子　（10・二二七六）

の歌で、この歌には雁の飛来と「萩」の開花が歌われている。「萩」の花は、雁が飛来する頃に散るといわれ、そこから雁と「萩」の花を直接的に結び付け、二一二六歌のように「雁の声によって萩の花が散る」と表現したり、二二七六歌のように、遅れて咲き始めた「萩」を、「雁の初声を聞いて咲き出した」と表現したのである。一方、先ほどの「もみつ」、「色付く」と同じく、鴨が「萩」と取り合わされて詠まれている歌はない。

また、雁が「寒し」とかかわって詠まれている歌は十三首ある。[9] これら十三首の中には次に掲げる歌（一五七五）のように、雁の声が「寒い」、または雁が「寒く」鳴いて、山、草、葉が色付くと詠まれているものが多い。その「雁の鳴き声が寒くて色付く」と歌われる背景には、いうまでもなく雁は秋に飛来する、という事実がある。その事実に基づいて、

雲の上に　鳴きつる雁の　寒きなへ　萩の下葉は　もみちぬるかも　（8・一五七五）

天雲の　よそに雁が音　聞きしより　はだれ霜降り　寒しこの夜は（一に云ふ「いやますますに　恋こそ増され」）　（10・二一三二）

のように、「雁の声が寒いと思ったら～色付き始めた」、「雁の声を聞いて以来～寒い」と歌っている。ただ秋になって飛んで来て鳴くにすぎない雁を「寒し」と結び付け、あたかも雁の鳴き声が「寒く」て、もしくは雁が「寒く」鳴くから色付く、というように表現しているのである。一方、鴨が「寒し」と取り合わせて詠まれている歌は二首あるが、「寒き夕は　大和し思ほゆ」（六四）、「寒き夕し　汝をば偲はむ」（三五七〇）と、妻（妹）が据えられている点は雁の歌とは大きく異なっている。

以上、雁の歌をみてきた。多くの歌が「もみつ」、「萩」、「寒し」と取り合わされて詠まれており、雁に関する知識や発想を背後に、歌の内部に秋を代表する景として取り込まれていることが分かる。そして、それによって、雁に対する秋の景物としてのあり様が形成されているのだろう。

三　雁の相聞と「使い」

次に、用例は少ないが、相聞に歌われている雁の歌をみてい

部立て	相聞	挽歌	雑歌	その他	合計
雁	5	3	48	10	66

く。次表のように、雁は相聞に五首歌われている。

第一例（一六一四）は、

遠江守桜井王、天皇に奉る歌一首

九月の　その初雁の　便りにも　思ふ心は　聞こえ来ぬかも　（8・一六一四）

である。「雁の便り」とは、周知の通り、

昭帝即位数年、匈奴與レ漢和親、漢求二武等一、匈奴詭言二武死一、後漢使復至二匈奴一、常惠請二其守者一、與俱得二夜見一、云々、教二使者一、謂二単于一言、天子射二上林中一得レ鴈、足有レ係二帛書一、言武等在二某澤中一、使者大喜、如二惠語一以讓二単于一、単于視二左右一、而驚謝二漢使一曰、武等実在。（『漢書　蘇武伝』）

とあるように、消息をもたらす使いの雁のことをいう。一首は、桜井王が天皇からの便りを期待して奉ったものである。

第二例（二二六六）は、

雁に寄する

出でて去なば　天飛ぶ雁の　泣きぬべみ　今日今日と言ふに　年そ経にける　（10・二二六六）

である。第二句「天飛ぶ雁の」は、下の「泣きぬ」の比喩、すなわち妻の比喩で、「大空を鳴き渡る雁のように妻が泣くに違いないので、旅に出ることもできず年が経てしまった」という、どうすることもできない男の気持ちが詠まれている。

第三例（二二七六）、

花に寄する

雁がねの　初声聞きて　咲き出たる　やどの秋萩　見に来我が背子　（10・二二七六）

について『全注』[19]は、「男性間で詠まれたともとれるが、萩の花を口実に夫の来訪を促した妻の歌ととるのが、自然であろう」とする。一首は「雁の初声を聞いて咲き出したわが家の秋萩を見に来てください」という意味である。

第四例（二二九四）は、

山に寄する

秋されば　雁飛び越ゆる　龍田山　立ちても居ても　君をしそ思ふ　（10・二二九四）

であり、この歌の上三句は「立つ」を起す序詞で、第二句の「雁飛び越ゆる」は、第三句の「龍田山」を歌うために用いられて

いるだけで、雁は、相聞にはかかわっていない。

最後の第五例（三二八一）は、

我が背子は　待てど来まさず　雁が音も　とよみて寒し　ぬばたまの　夜もふけにけり　さ夜ふくと　あらしの吹けば　立ち待つに　我が衣手に……　（13・三二八一）

であるが、待っても来ない人を待つ女の気持を表すのに、雁の鳴き声が用いられている。

これらの五首中、二一六六歌（第二例）、二一七六歌（第三例）、三二八一歌（第五例）の三首はたしかに雁にかかわって詠まれた恋歌であるが、残る二首は雁と恋とが直接的にかかわっていないものである。こうしてみると、雁が恋情とかかわって詠まれた例はわずか三首に留まることになる。雁は、恋歌にはなじまない鳥として理解されていたのであり、巻八と巻十の「秋雑歌」に三十七首も歌われていた雁が、相聞の巻である巻四と巻十一・十二には一首も歌われていない理由も説明できると思われる。

一方、相聞に分類されていないが、恋歌的に解釈できそうな雁の歌もある。[11]

妹があたり　繁き雁がね　夕霧に　来鳴きて過ぎぬ　すべなきまでに　（9・一七〇二）

春草を　馬咋山ゆ　越え来なる　雁の使ひは　宿り過ぐなり　（9・一七〇八）

明け暗の　朝霧隠り　鳴きて行く　雁は我が恋　妹に告げこそ　（10・二一二九）

天飛ぶや　雁を使ひに　得てしかも　奈良の都に　言告げ遣らむ　（15・三六七六）

あしひきの　山飛び越ゆる　雁がねは　都に行かば　妹に逢ひて来ね　（15・三六八七）

八月七日の夜に、守大伴宿祢家持が館に集ひて宴する歌

今朝の朝明　秋風寒し　遠つ人　雁が来鳴かむ　時近みかも　（17・三九四七）

雁がねは　使ひに来むと　騒くらむ　秋風寒み　その川の上に　（17・三九五三）

常陸さし　行かむ雁もが　我が恋を　記して付けて　妹に知らせむ　（20・四三六六）

まず、第一例（一七〇二）は人麻呂歌集所出の用例で、「妻の家の辺りでしきりに鳴いた雁が、（今）夕霧の中を来鳴いて通りました。せつなくなるほどに」と歌っている。また、第二例（一七〇八）も人麻呂歌集所出歌であり、雁を家郷の妻からの使い

と見立てて、雁の声だけを聞いて「越え来なる」、「宿り過ぐなり」と推定したものである。

続く第三例（二一二九）は、「私の恋しい思いを妹に告げてくれ」と歌い、朝霧の中を鳴いて行く雁を「使い」と見立てている。

このようにみると、第一例（一七〇二）の「夕霧に　来鳴きて過ぎぬ」も「雁の使い」と理解してよかろう。従来の注釈書はふれていないが、一首は夕霧の中を鳴いて通り過ぎた雁を、妻からの使いと思い、その声を聞くと妻のことが恋しく思われるという、「雁の使い」を詠んだものと思われる。

そして第四例（三六七六）、第八例（四三六六）には、故郷にいる妻へ思いを伝える「雁の使い」が詠まれている。

第五例（三六八七）は、山を飛び越える雁に「都に行くのなら、妻に逢って来てくれ」と歌い、右の歌々と同様「雁の使い」を詠んでいる。

最後に第六例（三九四七）と第七例（三九五三）は、家持が国守として越中に赴任して一ヶ月目に行われた宴席での十三首（三九四三〜三九五五）中の家持作歌である。この二首は三九四七歌（第六例）の第三句「遠つ人」[12]と、三九五三歌（第七例）の結句「その川」[13]の解釈が割れている。三九五三歌（第七例）の「その川」について『総釈』は、

略解と古義とは、京の中にある河としてをる。しかし、南方にあたる奈良の都にはやく雁が来るといふことも、事実にそむいてをる。代匠記精選本に「その河邊とは、雁の住む胡国の川邊なり」とあるのに従ふべきであらう。雁の住む国の川のほとりで、使として南をさして飛び立とうとして、鳴きさわいでをるのであらう。

と、雁の飛来の時期と結び付けて解している。これに対して『集成』は、「川は佐保川を思い浮べた」と解しており、雁は都から来るものとして把握されている。そこで、当該三九五三歌（第七例）と同じ場で詠まれた他の歌をみると、都の妻への思いを詠んだ家持の次のような歌がある。

天ざかる　鄙に月経ぬ　然れども　結ひてし紐を　解きも開けなくに　（17・三九四八）

家にして　結ひてし紐を　解き放けず　思ふ心を　誰か知らむも　（17・三九五〇）

この二首には、家で妻が結んでくれた紐、その紐を都を離れて来て一ヶ月経った今も解きあけたことがなく（三九四八）、ひたすら妻を思う心（三九五〇）が詠まれ、家持が望郷の念、妻への思いを深めていることが分かる。その妻への思いが当該三九

五三歌（第七例）の「雁の使い」に託されているとみてよいのではなかろうか。結句の「その川」がどこの川を指しているのか確定することは出来ないが、「雁に雁信を連想し、更に京に残して来た妻を連想する」（『窪田評釈』）のはそれほど難しくないだろう。[14]

すると、三九四七歌（第六例）も雁の使いを詠んでいる可能性が高いと思われる。第三句の「遠つ人」は、「単なる枕詞ではなく、都と異郷を結ぶ『雁』によせて、都を偲ぶ[15]」気持を表わしている表現なのである。この一首には、遠い北方から渡ってくる雁を人に見立て、「遠くの人の音信を運ぶ鳥とされた雁を通して、都（妻）の消息を待つ心が託されている」（『釈注』）のである。

以上、これらの歌八首は、相聞に分類されていないものの、妹（妻）からの、あるいは妹（妻）への思いを詠んだ恋歌といってよく、いずれの歌にも「雁の使い」が詠まれているのは注目に値する。

あらためて「雁の使い」の歌をみてみたい。歌を時代順に並べると次のようになる。

妹があたり　繁き雁がね　夕霧に　来鳴きて過ぎぬ　すべなきまでに　（9・一七〇二／人麻呂歌集）

春草を　馬咋山ゆ　越え来なる　雁の使ひは　宿り過ぐなり　（9・一七〇八／人麻呂歌集）

遠江守桜井王、天皇に奉る歌一首

九月の　その初雁の　便りにも　思ふ心は　聞こえ来ぬかも　（8・一六一四／桜井王）

天飛ぶや　雁を使ひに　得てしかも　奈良の都に　言告げ遣らむ　（15・三六七六／遣新羅使人）

あしひきの　山飛び越ゆる　雁がねは　都に行かば　妹に逢ひて来ね　（15・三六八七／遣新羅使人）

八月七日の夜に、守大伴宿祢家持が館に集ひて宴する歌

今朝の朝明　秋風寒し　遠つ人　雁が来鳴かむ　時近みかも　（17・三九四七／家持）

雁がねは　使ひに来むと　騒くらむ　秋風寒み　その川の上に　（17・三九五三／家持）

常陸さし　行かむ雁もが　我が恋を　記して付けて　妹に知らせむ　（20・四三六六／物部道足）

明け暗の　朝霧隠り　鳴きて行く　雁は我が恋　妹に告げこそ　（10・二一二九）[16]

万葉前期の人麻呂歌集所出歌から第四期の家持、物部道足作

歌までおよそ全期にわたって散在している。これらの九首の中で、雁書が直接歌われているのは四三六六歌のみであるが、いずれも雁信の故事を踏まえたものであることは動くまい。

ところで、ここで注目したいのはこれらの九首のうち一首、すなわち桜井王が聖武天皇に奉った一六一四歌を除く八首が恋歌であることである。このことは大きい意味を持つであろう。先ほどの「雁の使い」とかかわっていない恋歌が、三首しかなかったことと合せて考えると、雁は、「雁の使い」以外、恋歌には不適当だったといってよいほどである。

以上、雁の恋歌と「雁の使い」の歌をみてきた。雑歌において秋の景物として歌われていた雁は、相聞においては恋歌に相応しくない鳥として認識されていた。一方、「雁の使い」に限っては恋歌の題材となり、雁全体の認識に対して特異であった。この点については後に詳述することにして、次に鴨の歌についてみていく。

四　鴨の歌

鴨（あぢを含めて）は集中に三十五首歌われている。歌われている季節をみると、次の表のように、季節がはっきりしない歌が目立ち、雁が秋に多く詠まれているのと対照的である。

季節	春	夏	秋	冬	不明	合計
鴨	6	4	**5**	2	18	35
雁	4	0	58	0	4	66

また、部立てをみると、雑歌に偏っている雁に比べて、鴨は相聞に多く歌われていることが分かる。

部立て	相聞	挽歌	雑歌	その他	合計
鴨	17	3	7	8	35
雁	5	3	48	10	66

ここで雁と比較するため、鴨が詠まれている秋の歌五首（表中の太字）をみてみたい。まず、最初の例（四六六）は、

我がやどに　花そ咲きたる　そを見れど　心も行かず　はしきやし　妹がありせば　水鴨なす　二人並び居　手折りても　見せましものを……　（3・四六六）

であるが、「亡妾悲傷歌」と呼ばれる家持の亡妻挽歌で、傍線部の「水鴨なす　二人並び居」は、鴨がよく雌雄並んで水に浮かんでいることから、男女仲睦まじく寄り添っていることにたと

えた表現である。「水鴨」の比喩が用いられるほど、鴨は、恋情と密接であったということであろうが、雁の秋の歌のような、鴨と秋との関係は示されていない。

次の第二例（七一一）は、

鴨鳥の　遊ぶこの池に　木の葉落ちて　浮きたる心　我が思はなくに　（4・七一一）

である。この歌の上三句は「浮きたる」を起す序詞で、「浮きたる心」とは、水面に落ちた木の葉が風のままにあちらこちら漂うように、安定しない浮気な心を意味する。

続く第三例（一七四四）は、

埼玉の　小埼の沼に　鴨そ翼霧る　己が尾に　降り置ける霜を　払ふとにあらし　（9・一七四四）

であり、鴨が自分の尾に降りかかった霜を払っていると歌われ、「鴨の羽に霜が置くという描写は、よくその季節に適っている」（『新大系』）といわれる。しかし、次に掲げる歌のように、

葦辺行く　鴨の羽がひに　霜降りて　寒き夕は　大和し思ほゆ　（1・六四）

夕されば　葦辺に騒き　明け来れば　沖になづさふ　鴨すらも　つまとたぐひて　我が尾には　霜な降りそと　白たへの　翼さし交へて　打ち払ひ　さ寝とふものを　……　（15・三六二五）

と、鴨の羽と霜が歌われる中に、妻（妹）が想定されている点[17]は注目される。鴨と霜の取り合わせは、鴨を秋の景として詠むための表現というよりは、鴨が仲よく寄り添って翼を差し交わしながら降りかかった霜を払うという点から、恋情的情趣を醸し出すために用いられた表現といってよかろう。

第四例（三五七〇）をみると、

葦の葉に　夕霧立ちて　鴨が音の　寒き夕し　汝をば偲はむ　（14・三五七〇）

のように、第三例（一七四四）と同様、鴨の声と妻とが密接に結び付いている。そして、最後の第五例（三六二五）には、

夕されば　葦辺に騒き　明け来れば　沖になづさふ　鴨すらも　つまとたぐひて　我が尾には　霜な降りそと　白たへの　翼さし交へて　打ち払ひ　さ寝とふものを……　（15・三六二五）

と、夫婦寄り添って共寝をするさまが鴨に擬えて歌われている。

以上の歌をみてくると、鴨は、秋の景と結び付いて詠まれているよりは、「水鴨なす」のように恋歌的文脈で詠まれており、やはり、雁が秋の景物とかかわって詠まれているのと対照的といえる。

続いて、次の鴨の歌をみてみたい。

軽の池の　浦回行き廻る　鴨すらに　玉藻の上に　ひとり寝なくに　（3・三九〇）

あぢ群の　とをよる海に　舟浮けて　白玉採ると　人に知らゆな　（7・一二九九）

我妹子に　恋ふれにかあらむ　沖に住む　鴨の浮き寝の安けくもなき　（11・二八〇六）

鴨すらも　己がつまどち　あさりして　後るる間に　恋ふといふものを　（12・三〇九一）

水久君野に　鴨の遊ほのす　児ろが上に　言をろ延へていまだ寝なふも　（14・三五二五）

葦辺行く　鴨の羽がひに　霜降りて　寒き夕は　大和し思ほゆ　（1・六四）

葦の葉に　夕霧立ちて　鴨が音の　寒き夕し　汝をば偲はむ　（14・三五七〇）

立ち鴨の　立ちの騒きに　相見てし　妹が心は　忘れせぬかも　（20・四三五四）

これらの歌は、相聞に詠まれている十七首[18]のうちの五首（三九〇、一二九九、二八〇六、三〇九一、三五二五）と、相聞に分類されていないが、恋歌的に解釈できそうな三首（六四、三五七〇、四三五四）である。歌をみると、雁の恋歌ではみられなかった相聞的表現が際立つ。池や沖に「住む」という表現や、「浮く」、「浦回行き回る」、「寝」、「恋ふ」、「遠ふ」などといった表現は、雁の恋歌が「雁の使い」に集中しているのと異なる。やはり、鴨は、雁とは違って恋情とかかわって詠まれる傾向が強いといえよう。このことは、鴨の歌三十五首のうち、半分を超える二十首が恋歌であることにも示されている。

五　万葉集における雁

以上、集中の雁と鴨の歌をみてきた。続いて、その中でも極めて特徴的とみられる「雁の使い」について論を進める。この点を論じるために、まず上代にみえる「鳥の使い」について述べる必要があろう。

「鳥の使い」は『古事記』[19]にもみえる。

……「天若日子、久しく復奏さず。又、曷れの神を遣してか天若日子が淹しく留まれる所由を問はむ」ととひき。是に、諸の神と思金神と、答へて白さく、「雉、名は鳴女を遣すべし」とまをす時に、詔ひしく、「汝、行きて……」……亦、其の雉、還らず。故、今に、諺に「雉の頓使」と曰ふ本は、是ぞ。　（「上巻　忍穂耳命と邇々芸命」）

ここでは雉が使いとして表現されている。また、「允恭記」の、軽太子が大前小前宿禰に捕まえられた後、軽大郎女に歌いかけるウタの中には、

故、其の軽太子は、伊余湯に流しき。亦、流さむとせし時に、歌ひて曰はく、

天飛ぶ　鳥も使そ　鶴が音の　聞えむ時は　我が名問はさね　（記八四）

のように、伊予と大和と言葉を伝え合うのに空を飛ぶ鳥、鶴を使者として見立てている。「鶴の使い」について『新編全集』は、

鳥の中でも鶴が選ばれたのは、渡りの鳥だから。遠い距離でも渡りの鳥なら使いとなる。長く続くであろう別離の時間を覚悟しながら、年に一度言葉を通わすことが願われている。

とする。しかし、「鶴の使い」にしても前述の「雉の使い」にしても、なぜ鶴や雉が選ばれたかは様々な説があって決め難い。[20]ただし、鳥を使いとして捉える発想が万葉以前の時代からあったことは認めてよいだろう。

鳥を使いとすることについて、土橋寛氏（『古代歌謡全注釈　古事記編』角川書店・一九七二年）は、

鳥は霊魂の姿と見られ（鳥形霊）、また霊魂を運ぶものとか、祖霊の乗り物などと考えられたから、そこから言葉を運ぶ使いの観念もうまれたのであろう。

と述べている。土橋書のいう、「鳥は霊魂……霊魂を運ぶもの」として捉える観念があったことは、倭建命の魂が白鳥となって飛んでいくヤマトタケルの話からも知られるし、そのような観念が、言葉を伝える「使いの鳥」という発想を生んだのであろうことは容易に想像できる。

また、万葉集の巻十一の人麻呂歌集所出歌には、

妹に恋ひ　寝ねぬ朝明に　鴛鴦の　こゆかく渡る　妹が使ひか　（11・二四九一）

と、夜明けに飛び渡っていく鴛鴦を使いと歌う例がある。この「鴛鴦の使い」が、雁信の故事を鴛鴦に応用したものであるか、鳥を人の魂の象徴と見る日本の古くからの伝統であるかを確定するのは難しいが、

鳥に使を連想するのは伝統的な感情であるから、さして甚しいものではない。それよりも男は、雌雄むつまじい鴛鴦にさうした感をつないだことに慰みを感じたのである。

（『窪田評釈』）

と理解するのが当っているのではあるまいか。鴛鴦を仲睦まじいとするのは、『日本書紀』[21]のウタに、

山川に　鴛鴦二つ居て　偶ひよく　偶へる妹を　誰か率にけむ　（紀一一三）

とあるようによく知られたことであり、鴛鴦の仲睦まじさと、右に掲げた「雉の使い」や「鶴の使い」のような、言葉を伝える鳥という発想が重なり合い、「恋の使い」としての鴛鴦が詠まれたのであろう。

次にあらためて「雁の使い」をみてみたい。雁は、前述のように秋の景物としてのあり様が形成され、恋歌にはなじまない鳥として理解されていた。一方、日本には「使いの鳥」という発想が古くからあった。こうしてみると、雁が恋歌に詠まれたのは、漢籍の雁信の影響を抜きには考えられまい。

言葉や言霊を運ぶものとして「使い」となる鳥、「恋の使い」になる鳥、という古来の発想があって、そこに雁信の故事が入ることにより、恋歌には適さない鳥であった雁が、恋歌において「使い」として詠まれるようになったのであろう。

「雁の使い」の早い例は人麻呂歌集にみえるが、前にふれた「雉の使い」や「鶴の使い」は集中に一例もない。また、「鴛鴦の使い」も先ほどの人麻呂歌集の一首のみで以降詠まれることはなく、「ホトトギスの使い」が第四期に二例みえるだけである。[22] ここから考えると、万葉和歌にあっては、雁信の故事が及ぼした影響は大きく、雉や鶴、鴛鴦、ホトトギスといった「使い」としての鳥は、雁に収斂されていったといえよう。ただし、「雁の使い」といっても、雁書が直接歌われているのは一例のみで、他は雁に託す言伝てであり、さらに、蘇武伝の雁書が「恋の使い」ではないのに、集中の「雁の使い」の大半が恋歌的文脈で詠まれているのは、漢籍の雁信を背景として、「使い」としての雁の意味が広まったと理解できよう。そして、その雁の意味の広まりには、古くから日本にあった「鳥の使い」が、言葉を伝える「使い」、「恋の使い」であったことにもよるのではなかろうか。

ところで、『懐風藻』[23]には、雁が

燕巣夏色辞り、鴈渚秋声を聴く。　（釈智蔵・秋日言志）

晩燕風に吟ひて還り、新鴈露を払ひて驚く。　（道公首名・秋宴）

寒蝉唱ひて柳葉颯り、霜鴈度りて蘆花落らふ。　（山田史三方「序」）

寒蝉葉後に鳴き、朔鴈雲前を度る。　（下毛野朝臣虫麻呂・秋日於長王宅宴新羅客）

蝉は息む涼風の暮、鴈は飛ぶ明月の秋。　（安部朝臣虫麻呂・秋日於長王宅宴新羅客）

斜雁雲を凌ぎて響し、軽蝉樹を抱きて吟く。
（石上朝臣乙麻呂・羈寓南荒贈在京故友）

夕鶩霧の裏に迷ひ、暁雁雲の垂に苦しぶ。
（石上朝臣乙麻呂・贈旧識）

と、秋の訪れを告げる雁の声や、帰る燕と飛来する雁、夏のひぐらしと秋の雁の取り合わせとして登場する。そして、これらの七例のうち五例は飛来や秋空、雲間を飛んでいる雁を詠んでおり、『懐風藻』においては雁は秋の景物として詠まれることはあっても、「雁の使い」が詠まれることはなかった。これに対して、万葉和歌は漢籍の雁信の影響を受けながら、もともと日本にあった使いの鳥の観念と融合させ、和歌における「恋の使いの雁」という、雁像を作り出したのである。

夜の秋空を飛ぶ雁は、秋を代表する景物とかかわりながら、秋の代表的景物として雑歌の世界を形成する。その傍らでは、「鶴の使い」、「鴛鴦の使い」などの使いの鳥は、「雁の使い」に収斂していき、思いを伝える鳥の代表として後世の『古今集』[24]などに詠み続けられるようになるのであろう。

六　むすび

集中の雁は、多くが秋の季節的観念を表すものとして歌われている。そして、恋歌においては「恋の使い」として詠まれているのがその大半を占めている。前者が習性によるものなら、後者は雁信の故事の影響によるものである。この漢籍の雁信の故事の影響により、万葉以前の時代から日本にあった「鳥の使い」は「雁の使い」に収斂していき、「雁の使い」だけが恋歌に残される。季節的観念が強かった雁が恋歌に詠まれたのは、漢籍の影響によるものであったのである。

習性によって盛んに季節的観念として歌われ、恋歌になじまない鳥として認識されていた雁は、漢籍の影響によって、恋歌の「使いの鳥」として歌われていくのである。その点において万葉集における雁は、秋を代表する鳥でありながら、「恋の使い」を代表する鳥であったといってよいだろう。

【注】

（1）歌の引用は塙本CD―ROMによる。ただし、一部私に改めた箇所がある。

（2）鴨は巻八の「春相聞」に一首（8・一四五一）のみある。

（3）巻四と巻十一・十二に鴨（あぢを含めて）は十首歌われている。

（4）「仁徳記」（仁徳紀も同様）には、「雁」の記事があり、渡り鳥である雁が日本で生むはずのない卵を生み、そうしたありえないことが起きたことが瑞祥とされている。

（5）冒頭でも述べたように、雁と鴨は日本には秋に北方から飛

来し、春に帰る渡り鳥である。その特徴の類似点から両鳥を比較の対象とした。

(6) 九四八、四一四四、四一四五、四三六六歌の四首。

(7) 一五一三、一五四〇、一五七五、一五七八、一七〇三、二一八一、二一八三、二一九一、二一九四、二二〇五、二二〇八、二二二二、二二一四、四一四五、四二九六歌の十五首。

(8) 一五七五、二〇九七、二一二六、二一四四、二二七六、三六九一、四二二四、四二九六歌の八首。

(9) 一一六一、一五四〇、一五五六、一五七五、一五七八、一七五七、二一三二、二一八一、二二〇八、二二一二、三二八一、三九四七、三九五三歌の十三首。

(10) 注釈書名は、通行の略称を用いた。

(11) この他にも恋歌的に解釈できそうな歌に、一五一五、一五六二、一五六三、一五七四、二一三二（異伝）歌があるが、これらの歌五首は、雁が恋とはかかわっていなかったり、戯れ歌であったり、または恋歌とはいえないものである。

(12) 「遠つ人」については、「雁の使い」と捉える説（『集成』、『万葉集（講談社文庫）』、『釈注』）と、ただ遠い所から渡ってくる雁を人に見立てたとする説（『窪田評釈』、『新編全集』、『全注』）に分かれている。

(13) 「その川」については、北方の国の川とする説（『代匠記（精）』、『総釈』、『全釈』、『注釈』、『古典全集』、『窪田評釈』）、都の奈良の川とする説（『略解』、『古義』、『集成』、『釈注』）、越中の川とする説（『新大系』）、未知の世界とする説（『新編全集』）など、様ざまな説が行われている。

(14) この他にも諸注釈書が、「雁に託して都への便をしようといふのであらう」（『全釈』）、「この地を通って都への使いに」（『万葉集（講談社文庫）』）、「三九四七の自歌を受け継いで、……雁を妻の使者と見立てたもの」（『釈注』）、「雁は自分の思いを伝えに、越中から都へ向かって飛んで行くと捉えているはずである」（『新大系』）と述べている。

(15) 森淳司氏（「万葉集宴席歌考―天平十八年八月七日、大伴家持の館の集宴歌十三首―」美夫君志二六号・一九八二年）

(16) 作歌年代の不明な二一二九歌は仮に前作に則した。

(17) 伊藤博氏「家と旅」（『万葉集の表現と方法　下』塙書房・一九七六年）

(18) 鴨の歌十二首（三九〇、七二一、七二六、一四五二、二七二〇、二八〇六、二八三三、三〇九〇、三〇九一、三五二四、三五二五、三五二七）と、あぢの歌五首（四八五、四八六、一一九九、二七五一、三五四七）を合わせた十七首。

(19) 『古事記』の引用は『新編日本古典文学全集　古事記』による。

(20) 相磯貞三氏（『記紀歌謡全註解』有精堂・一九六二年）は鶴の使いについて、記八四と一群をなす前二歌（記八二・八三）の「天飛ぶ　軽の嬢子」の地名「軽」が、「雁」の意味を持っていることから、「雁は、上代人の観念の上の国土、即ち、常世の国から飛来して、有力な霊魂を人間に付着させ、復活せしめるという信仰に基づく禽鳥である。従って、水禽の鳴声を聞いた時に、対手の名を呼ぶということの意味があるのである。ここでは招魂の目的物に鶴（たず）が用いられていたことが理解される」とする。また、雄の使いについて『新編全集』は、雄が選ばれたことを疑問にしながら「後出の『雄の頓使』という諺から発想されたか」と頭注をつけている。更に、平舘英子氏（『鶴が音』考」（『万葉集研究　第二十六集』塙書房・二〇〇四年）は、鶴の使いについて「『鳥も使いそ』が『多豆賀泥（鶴が音）

の　聞えむ時は』と聴覚に導かれている点とに注意したい……姿ははっきりしない遠くから、聞こえないはずのその声が遥かに聞こえる、その霊妙さこそが、二人を繋ぐ使いとして感得されている事を意味しよう」と述べている。そして、雉の使いについてもその声の霊妙さから、「『鳥の使い』は姿がはっきりとせず、その鳴き声が聞こえることにこそ意味が求められていた」とする。

(21)　『日本書紀』の引用は『新編日本古典文学全集　日本書紀』による。

(22)　「ホトトギスの使い」二首。

暇なみ　来ざりし君に　ほととぎす　我かく恋ふと　行きて告げこそ
（8・一四九八）

故郷の　奈良思の岡の　ほととぎす　言告げ遣りし　いかに告げきや
（8・一五〇六）

(23)　『懐風藻』の引用は『日本古典文学大系　懐風藻　文華秀麗集　本朝文粋』による。

(24)　歌の引用は『新編日本古典文学全集　古今和歌集』による。

春くれば雁帰るなり白雲の道ゆきぶりに言やってまし
（春上　三〇）

秋風にはつかりがねぞ聞ゆなる誰が玉梓をかけて来つらむ
（秋上　二〇七）

（パク　ヒスク・本学大学院博士後期課程在学）